

第29回岐阜大学動物病院 獣医臨床セミナーのご案内 ※本セミナーは名古屋市獣医師会との共催です

日時 2013年10月27日（日） 14時～17時
会場 名古屋市獣医師会館
申し込み方法 当日受付のみ（参加費は無料）

教育講演 **-がんを知り、がんを減らす-**
犬がん登録を『岐阜県』からはじめよう
岐阜大学動物病院腫瘍科・比較がんセンター 丸尾幸嗣

小動物臨床獣医師は、日々臨床の最前線で犬の難敵である”がん”の一例一例に対して真摯に精魂込めて戦っているが、いつも良好な結果が得られるわけではない。現状で最善の治療を実施しても打ち勝てない壁が存在する。小動物臨床獣医師は、日々のがんの動物とその飼主の対応だけでなく、それらの症例データを広く集約・活用することによって、がんを俯瞰し、新たながん対策を企画・立案できることを認識すべきである。日々の臨床活動で得られたデータを組織的に収集することは、がん登録を推進させ、がん予防等のがん対策を実現する原動力になる。本講演では、がん克服への道のりには時間を要すると思われるが、従来のがん診療の戦いに加えて、がんを知り、がんを減らすためにはがん登録が不可欠であることを強調したい。そして、ヒトにおけるがん登録の歴史と現状を紹介し、続いて岐阜大学比較がんセンター・動物病院と岐阜県獣医師会開業部会が一体となって、岐阜県をモデルとしたわが国初の犬がん登録を2013年1月より開始したので、その概要を報告するとともに、その先の目指すものについても触れてみたい。

症例検討 [1] 原発性上皮小体機能亢進症の犬の4例
岐阜大学動物病院 腫瘍科 矢野将基

犬の原発性上皮小体機能亢進症は、上皮小体腫瘍（腺腫や癌）または過形成を原因とし、上皮小体ホルモンを過剰に分泌する稀な疾患である。持続的でかつ長期的な高カルシウム血症が特徴的で、多飲多尿を伴う場合や無症状で偶発的に発見し診断に至る。これまでに我々は原発性上皮小体機能亢進症と診断した犬4例に遭遇した。4例中3例は腫脹した片側上皮小体を切除した。その内の2症例は術後良好な経過が得られているが、1例は術後の低カルシウム血症による筋痙攣や発作を伴い、カルシウム値の管理に苦慮した。また、1例は高カルシウム血症に起因する急性膀胱炎を合併し、内科治療を行ったものの、上皮小体切除には至らず死亡した。これら4症例の臨床症状や経過について報告する。

症例検討 [2] 猫の胸椎骨肉腫の2例
岐阜大学動物病院 外科 浅田慎也

骨肉腫は猫の骨原発の腫瘍で最も一般的に認められる腫瘍であるが、猫の骨肉腫は犬の骨肉腫と異なり、比較的転移が起こりにくいとされている。発生部位は体肢骨格が最も多く、椎体での発生は稀である。椎体に発生した骨肉腫では、腫瘍の脊髄圧迫による慢性進行性の運動障害が認められる。また体肢骨格の骨肉腫と異なり、椎体の骨肉腫は完全切除が困難であるため、補助化学療法や放射線療法による局所再発の制御が重要である。今回我々は、猫の胸椎骨肉腫の2症例に対して外科手術と補助的放射線治療を実施し、局所制御が可能であったため、その概要を報告する。

協賛企業からのメッセージ

14時より、本セミナーにご協賛いただくアニマルオルソジャパン様から「アニマルオルソジャパンの治療用装具の紹介」のご講演があります。株式会社インターブー様のご協力により、教育講演の内容をJ-VET誌に掲載します。本教育講演の要旨はJ-VET誌2013年9月号に掲載しています。今後は、臨床セミナーの教育講演の要旨がJ-VET誌に事前（1ヶ月前）に掲載されます。